ふるさと考古歴史館　特別企画展

解説パネル資料

不動寺（フヅシ）の地に成るマツリの跡

―不動寺遺跡（ふどうじいせき）と“祭祀的（さいしてき）”な痕跡―

“うめる”
（古代の土師器甕埋納土坑）

“ならべる”（弥生時代～古墳時代の河川における土器祭祀）

関連イベント：展示説明会　※無料

日時：11/16（日）、12/21（日）、1/18（日）全て13：30から30分ほど

2025.11.11（火）▶2026.1.18（日）

［開館時間］午前9時～午後5時　［休館日］月曜日（休日の場合は翌平日）、12月29日（月）～1月1日（木）

［観 覧 料］無料（ただし、常設展示は、小・中学生220円、高校生以上450円）

鹿児島市立 ふるさと考古歴史館　〒891-0144 鹿児島市下福元町3763番地1　TEL（099）266－0696

１“フヅシ”の地のあらまし

山崎五十麿の功績

大正三年（1914 年）、ニール・G・マンローによる石郷遺跡（鹿児島市吉野町）や柊原遺跡（垂水市）の発掘調査が、鹿児島における近代考古学の始まりとされています。その同時代の考古学者として知られるのが山崎五十麿です。山崎は、大蔵省専売局鹿児島支局での勤務のかたわら、県内全域を対象とした調査研究を精力的に行いました。その成果は『考古学雑誌』などの専門誌で発表され、全国の考古学者へ情報が発信されていきます。山崎の報告が後の発掘調査の契機となった遺跡には、橋牟礼川遺跡（指宿市）や出水貝塚（出水市）など学史上著名なものが含まれます。本展の主役である不動寺遺跡もまたその中の一つにあげられます。

フヅシの地から不動寺遺跡へ

現在のＪＲ慈眼寺駅の北側一帯は、大正八年（1919 年）、山崎五十麿による踏査によって初めて遺跡であることが周知されました。鹿児島郡谷山町大字上福元字“不動寺”（地元での呼称）の地を訪れた山崎は、田園地帯を流れる川に大量の土器片が散乱する様を『考古学雑誌』で報告しています。山崎は、多数の「黄白色の軽石質の墓石」と、その下から出土した副葬品（「彌生式土器」の「花瓶」）から、当地が墓域であること、弥生時代からの祭祀・葬送儀礼（土器の副葬）が近世まで続いたことを指摘しています。各資料の位置づけには現在の研究成果と異なる点はありますが、〝フヅシ〟における祭祀の存在は、約 100 年後の発掘調査・諸研究によって追認されていくことになります。

遺跡におけるマツリの跡

フヅシの地でも確認された「祭祀」。〝マツリ〟の文字を連ねたこの言葉は、「神仏や祖先、自然などに対する儀礼や祈り、信仰のこと」を意味します。〝物質〟を対象とする「考古学」において、日常的に使用する道具（例えば狩猟具、植物加工具など）に比べ、特異な形状・出土状況を示し、具体性のみえない道具には祭祀的用途が想定される傾向にあります。ただ、これらの痕跡は千差万別なため、目的（豊穣祈願、長命富貴、病気平癒、葬送儀礼、通過儀礼、年中行事など）に言及することは困難です。文字記録のない縄文時代～古墳時代ではなおのことでしょう。そこで、本展では不動寺遺跡の各時代の「日常」と対比し、何が〝祭祀的〟なのかについて紹介します。

２ 不動寺遺跡のマツリの移ろい

―縄文時代―

不動寺遺跡の縄文時代

標高約７ｍの低地に立地する不動寺遺跡において最初の人間活動が営まれたのは縄文時代前期末（約 5,400 年前）のことです。以降、縄文時代晩期（約 2,700 年前）にいたるまで、その営みが連綿と続いていきます。2007 ～ 2012 年の発掘調査では、竪穴住居跡５基、土坑 10 基、集石２基、周溝状遺構１基などが発見されました。遺物は２つの地層から出土しており、縄文時代前期末～晩期の各型式の土器（時代ごとの特徴により分類された深鉢や台付皿）や石器が大量に検出されました。各種石器には、石鏃（狩猟具）、石匙（動植物資源の加工具）、磨製石斧（伐開具）、石皿（製粉具）などが確認されており、鹿児島市内の低地に営

まれた最初期の生業の様子を知ることができます。

具現化の”鍵”は火山の恵み～象る～

文字資料が存在しない縄文時代において、具体的な祭祀の対象（信仰の存在）が認識されていたかどうかを知る術はありません。しかし、厳しく過酷な自然環境にある〝個〟の存在や様々な自然の恩恵を象った、あるいは形象化したと想定できる製品が存在します。不動寺遺跡では軽石を素材とした製品が数多く出土しており、その多くは穿孔や線刻によって成形されています。同様の製品は縄文時代後期～晩期（約4,400 ～ 2,700 年前）の南九州で顕著にみられ、対象も抽象的なものから、「人」・「性器」・「動物」・「舟」など具体的な事物を表すものまで確認されます。実用性を否定できない製品も中にはありますが、概ね、縄文時代の人々の「精神性を象った祈りの道具」と考えられています。

赤の意味、造りの意図～塗る・殊なる～

世界には顔や身体、道具に対し赤色顔料を塗布する民俗例が存在し、呪術や信仰の意図があるとされています。赤色顔料が塗布された土器や石器は、縄文時代後期以降の遺跡で出土することが多く、不動寺遺跡でも晩期の土器の外面や石皿の表面に確認されています。他遺跡では、縄文時代後期の加飾的な土器や軽石製品、骨角器に確認でき、塗布の仕方にある種の規則性がうかがえるものも存在します。これらは〝色〟という視覚的な効果をもたせていますが、不動寺遺跡からは、特殊な造りゆえに用途が不明な道具も確認されています。特に、土器の欠片を平面円形に再加工した円盤状土製品は、同時期の他遺跡からも数多く出土しており、祭祀具以外に玩具や漁撈具の可能性も指摘されています。

３ 不動寺遺跡のマツリの移ろい

―弥生・古墳時代―

不動寺遺跡の弥生時代・古墳時代

不動寺遺跡における発掘調査では、弥生時代～古墳時代に位置づけられる遺物が最も多く出土しています。弥生時代の明確な遺構は検出されていないものの、弥生時代中期～後期（約2,300 ～ 1,850 年前）の土器（甕・壺・高杯）、石庖丁（稲穂を摘み取る刃）、磨製石鏃（全面が磨かれた鏃）などが確認され、石庖丁の存在は水田稲作の存在を示唆しています。古墳時代に入ると、遺跡地を東流する河川に形成された微高地上に竪穴住居跡６基、土坑７基が検出されています。これらの遺構は、古墳時代前期（４世紀前葉～末）と古墳時代後期（６世紀～７世紀初頭）の２時期に分けられます。なお、山崎が「彌生式土器」として報告した「花瓶」は、古墳時代の土器（成川式土器）になります。

川のほとりのマツリの場～欠く・並べる～

不動寺遺跡における弥生時代～古墳時代の遺物の大半は河川跡（埋没河川）から出土しました。調査区を東流（西の台地側から海へ流れる）する河川は、弥生時代前期の遺物包含層を削平していることから、実際に流路として機能し始めたのは、弥生時代中期（約2,300 年前）以降と想定されています。埋没河川からは、弥生時代後期～古墳時代前期（２～４世紀）の壺が大量に出土しています。これらには、口縁部の打ち欠き、胴・底部への穿孔など、焼成後の意図的な加工（壺の機能を損なう行為）が

施されていました。また､川岸に壺や高杯、蓋があたかも並べられた（配置された）ように検出されました。これらは、水辺で展開されたマツリ（儀式）の痕跡と想定されています。

祭祀具の素材にみる革新と伝統～金と土～

不動寺遺跡で検出された埋没河川に祭祀性を与えたのは、焼成後に打ち欠きや穿孔が施された壺や河岸に配列された土器だけではありません。舶載鏡（中国で生産され日本に輸入された鏡）の破鏡（青銅鏡の破片を研磨・穿孔したもの)、特別な加工が施された鉄製の鏃などの金属器は、本市では不動寺遺跡の埋没河川でのみ確認されています。また、大きさや質から通常の使用に耐えないミニチュア土器（手づくねで成形された壺や甕､鉢など）や杓子状土製品、呪力や霊威を具えるとされる土製勾玉（瀧音 2019）もまた祭祀具の一種に位置づけられています。貴重品である金属器、〝形代〟（実物を模した道具）である土製品も不動寺遺跡の「河川祭祀」を担う重要な要素だったのです。

住まいで営む土器マツリ～組む・備える～

古墳時代におけるマツリの痕跡は、不動寺遺跡にみられたような河川跡に伴うものばかりではありません。集落（住居跡）出土の土器の中には、本来の機能が損なわれた土器を組み合わせて配置する事例や、完形の飲用器（酒・水などが入っていた可能性）を単独で供えた事例が確認されています。共通するのは、住居の床面で検出されていることで、意図的に配置、あるいは供献されたことがうかがえます｡このことは、「集団の全体か一部が保有する慣習」を示すとされ、「祈りや占いなどの祭祀儀礼の結果」であることが指摘されています（中村 2015)。なお、ミニチュア土器や杓子状土製品などは集落遺跡でも確認されることから、古墳時代の南九州通有の祭祀具だったといえます。

４ 不動寺遺跡のマツリの移ろい－古代－

不動寺遺跡の古代

不動寺遺跡では古代（平安時代：９～11 世紀）に位置づけられる遺構群（掘立柱建物跡 20 棟、区画施設（溝）３条、遣水遺構１条、池状遺構１基、火葬墓１基、円形周溝墓１基など）が検出されました。併せて、墨書・刻書（ヘラ書き）土器、各種の硯、越州窯系青磁、緑釉陶器、石製丸鞆（官人の役職を示すベルト飾り)、布目瓦（瓦葺きの建造物に伴う）なども出土しています。これらの遺構・遺物の性格や変遷を考慮すると、不動寺遺跡には当初、谿山郡（薩摩国の行政区画の一つ）の郡衙（律令制度下の公的施設）が置かれていたものの、10 世紀半ばを境に、「都の情報を取り入れることができる有力者の居館」に変容していった可能性が指摘されています（永山 2022)。

火葬に伴う葬送儀礼～弔う～

池や遣水（庭園に導水するための施設）を備えた居館地の隅で、火葬墓が１基検出されています。中央に据えた蔵骨器には人骨が納められ、土師器で口が塞がれていました。また、墓壙には近江産緑釉陶器皿（10 世紀後半）と在地の土師器が供えられていました。不動寺遺跡出土の緑釉陶器は本資料以外、防府･長門産に限られるため、その希少性がうかがえます。不動寺遺跡のすぐ南の台地（谷山弓場城跡）からは、〝

合わせ口〞土師器（「舎」・「大吉」と墨書）と鉄器が副葬された火葬墓が検出されており、両墓の被葬者の関係性が指摘されています（永山 2022）。なお、姶良市市頭Ａ遺跡の蔵骨器には「佛廣坐※」」と墨書されており、仏教と火葬との密接な関係が示唆されています。

※）墨書されている文字は「坐」の異字体

土葬に伴う葬送儀礼～弔う～

不動寺遺跡でも発見された火葬墓ですが、遺跡における検出例は少なく、鹿児島市内では３例の検出にとどまります。一方、火葬を伴わず、遺体を直に埋葬する土葬の痕跡も確認されています。不動寺遺跡で検出された円形周溝墓は、主体部（被葬者を埋葬する場所）が後世の開発で破壊されていたため、構造や被葬者の情報は不明です。しかし、主体部を平面円形に取り囲む溝（周溝）からは土師器が出土しており、周溝での儀礼（副葬）がうかがえます。なお、西北九州から来た官人の墓とされる円形周溝墓は、姶良市に多く確認されるのが特徴です。この他、床面に黒色土器や越州窯系青磁を安置した土壙墓（地面を掘り窪めて埋葬した墓）も確認され、これらは 10　世紀後半～ 11 世紀に位置づけられます。

器に込めた人の祈り～字と色～

鹿児島市で出土した墨書土器・刻書土器に記される文字に着目すると、公的施設を示す文字（「厨」：一之宮遺跡）、姓名を示す文字（「大伴」：湯屋原遺跡）、地名を示す文字（「下田」：川上城跡）などが確認されています。しかし、文字の具体的な意味・意図が明らかな事例は限られているのが現状です。不動寺遺跡では、姓名と考えられる「日下」や吉祥句（祝いの言葉）とされる「豊」が複数確認されており、後者については、書き手の祈りが込められた文字と考えられます。また、呪術的意味合いをもつ五芒星がヘラ書きされた土師器も確認されています。土師器には、赤色顔料を塗布したものもあり、「ハレ」（儀礼や祭礼、年中行事などの「非日常」）の場面での使用が想定されます。

土地へ奉る畏敬の念～埋める・納める～

不動寺遺跡の古代の遺構群からやや離れた地点で発見された土坑には、土師器甕５点と小皿 15 点が埋納（意図的に物品を土中に埋め納める行為）されていました。径約 0.6mの規模の土坑に５つの甕が置かれ、隙間なく小皿が詰められていました。また、甕の中に入っていた小皿もあり、本来、甕の蓋の役割を担っていたと想定されています。甕・小皿とも同型式に位置づけられるため、転用品ではなく、埋納行為のためにつくられたものと考えられます。類例に乏しく、遺構の性格に不明な点は多いものの、土地にまつわるマツリの痕跡（地鎮具）である可能性があります。編年的には 11 世紀に位置づけられ、これ以降、人間活動の中心は不動寺遺跡から、より海側（北麓遺跡）へ移っていきます。

５ 不動寺遺跡のマツリの移ろい－近世－

マツリの地の終わり～終う～

不動寺遺跡では 12 世紀以降、遺構・遺物の検出が極端に少なくなっています。そのため、中・近世の人間活動の中心は北麓遺跡や谷山城跡に移ったと考えられます。大正の頃に山崎五十麿が目にした光景、即ち人生を〞終う〞祭祀（墓地）の痕跡が、フヅシの地における最後のマツリの跡だっ

たといえるでしょう。市内では、近世墓に関わる遺構・遺物は上町地区（中・近世の寺社が集中する場所）で顕著に確認され、副葬品や六道銭（死者への手向けとする銭）、蔵骨器、墓碑などが検出されています。なお、不動寺遺跡では、直径約 1.5mの素掘りの井戸が発見されており、中から伏見人形（京都産の土人形）の男女一対が出土しました。これは井戸を〝終う〟際の儀礼（魂抜き）と想定されています。

〈引用参考文献〉

川口雅之・黒木梨絵・立神倫史 2020「鹿児島県における縄文土器の実年代－土器付着炭化物放射性炭素年代測定値から－」『研究紀要・年報　縄文の森から』第 12 号 pp. 1-22 鹿児島県立埋蔵文化財センター

坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 2004「墨書土器の性格」『研究紀要・年報 縄文の森から』第２号 pp. 71-80　鹿児島県立埋蔵文化財センター

寒川朋枝 2002「祭祀行為についての検討ー軽石製岩偶を素材としてー」『人類史研究』第 13 号 pp. 163-175 人類史研究会

寒川朋枝 2009「南九州の軽石製岩偶」『季刊考古学第 107 号 特集縄文時代の祭り』pp. 80-81 雄山閣

大工原豊・長田友也・建石徹編 2020『考古調査ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社

瀧音　大 2019『原始・古代日本における勾玉の研究』雄山閣

中村直子 2015「祭祀と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？ー鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器ー』pp. 59-64 鹿児島大学総合研究博物館

橋本達也 2025「鹿児島県域（大隅・薩摩地域）の古墳時代鏡」『第 26 回九州前方後円墳研究会長崎大会発表資料集九州島の古墳時代における銅鏡の様相』pp. 141-150 第 26 回九州前方後円墳研究会長崎大会実行委員会

永山修一 2022「鹿児島市不動寺遺跡の古代・中世」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 232 集 pp. 287-300 一般社団法人 歴史民俗博物館振興会

本田道輝 2025『～かごしまの考古学研究史～』上野原縄文の森第 71 回企画展講演会配布資料

山崎五十麿 1919「彌生式土器遺跡と墳墓との關係」『考古学雜誌』第 10 巻第 1 号 pp. 60-62 考古学会

令和七年度特別企画展

「不動寺の地に成るマツリの跡
―不動寺遺跡と“祭祀的”な痕跡―」

解説パネル資料（文章編）

発　行　鹿児島市立ふるさと考古歴史館
（公益財団法人 かごしま教育文化振興財団）

発行日　令和八年三月三十日